はじめに 6

第一章 本多勝一の冒険論 15
世界の可能性を拓け／冒険とは何か——本多勝一の冒険論／パイオニアワーク論の衝撃／人類史上最高の冒険とは？／「愚の骨頂」と誰もが思った

第二章 脱システムとしての冒険 45
エベレスト登山はなぜ冒険ではなくなったか／マニュアル化された登山／エベレストツアーにカオスはあるか／神話における脱システム／英雄の冒険を分析する／ナンセンのフラム号漂流と英雄の冒険／ツアンポー峡谷単独探検の神話構造

第三章 脱システムの難しさ 77
システムとしてのコスモス／現代のシステム／現代はなぜ冒険が難しくなったのか／情報通信テクノロジーの発達／ジャンル化／登山人気の違和感／脳のシステム化

第四章 現代における脱システムの実例 115
変質する北極点到達という行為／ピアリーが選んだ危険なルート／北極点到達の意義／なぜ冒険はスポーツ化するのか／自然環境の競技場化／新しい位相空間をめざす／人間の世界から狼の世界へ／エリスにおとずれた奇跡／服部文祥のサバイバル登山／過酷な冬期サバイバル登山／極夜の探検／天体を頼りに

第五章 冒険と自由 171
冒険の批評性／冒険における自由／自由と自力の関係／人はなぜ冒険をするのか／冒険者の倫理と世間の倫理の乖離／死を避けることが最優先ではない／那智の滝事件が意味するもの／自立した社会的異分子／冒険の社会的価値／なぜ冒険を書きのこすのか

終わりに——放棄される自由を前に 211

本書に登場した主要引用・参考文献 218

はじめに

私が探検や冒険の世界とかかわりを持つようになったのは、大学時代に探検部というクラブに入ってからである。

私が所属した探検部の部室は、大学の正門を入ったすぐ右側にある一号館という建物の五階にあった。その建物は、表向きは四階までしかないのだが、建物の奥のほうにある階段がなぜか四階の上に続いており、そのままあがっていくと屋根裏みたいな薄暗い空間に行くことができた。その空間はもう何十年も掃除されていないんじゃないかと思われるほど埃っぽく、夜になると天井の白い蛍光灯だけが弱々しく灯り、どこか非合法活動が営まれているような怪しさと胡散臭さが漂っていた。探検部はその怪しげな空間の奥のほうの部屋を部室として使用していた。六〇年代だか七〇年代だかの大学紛争の時代に内ゲバ殺人があり、探検部の連中はそのどさくさにまぎれて五階の一室を占拠し、それ以来、既得

権益化して部室として占拠しつづけているのだというような話を先輩から自慢気に聞かされたことがある。それが事実かどうかは知らないが、私は面白い話だと思って聞いていた。私は探検部というクラブや、その部室が持ついかがわしげな空気感が好きで、その空間が持つ磁場に自ら積極的に吸い寄せられていったのだった。

ということで私は毎日のように大学に行き、ただ部室でごろごろして煙草を吸うだけという大学生活を六年ほどつづけた。それは自分たちがいかにバカで役立たずなのかを競い合うかのような仲間たちとの怠惰な暇つぶしの季節だった。それは本当に無駄な日々だった。社会的生産性という観点から見れば、今、思い返してもゼロである。この非生産性はモラトリアムとかそういう言葉以前の問題であり、要するにそのときのわれわれはただ心臓を動かし、肺呼吸しているだけで、人間的な活動はほとんど何もしていないにひとしかった。もし私が部室で過ごした時間の中に〈何かをする〉という表現に耐えうるふるまいが一つあったとすれば、それは過去の活動の記録を見ることだけだったと思う。部室の本棚には過去の計画書とか報告書の類がファイルにまとめられており、私はそれらを開き、かつての部員たちの活動によく目を通していた。資料を読むのは、たしかに好きだった。

そして、それらの資料の中で断トツで私の目を引いたのが、〈三原山（みはらやま）〉とマジックで大

書されたケースの中に保管されていた書類だった。私が所属していた探検部の歴史において〈三原山〉といえば、一九六〇～七〇年代に継続されていた三原山噴火口探検のことにほかならず、ケースの中にはこの計画についての一連の文書がまとめられていた。

三原山計画とは、文字どおり伊豆大島（いずおおしま）にある活火山三原山の噴火口に可能なかぎり潜りこんで、内部のマグマ溜まりを見てやろうというものである。もちろん耐熱カメラを下ろしたり、ドローン（もちろん当時はそんなものはなかったが）を飛ばしたりといった研究者がやりそうな安全な場所から対象に近づくような方法ではなく、隊員自身が己の肉体を駆使して赤く煮えたぎるマグマを記録してやろうという探検部らしい活動だった。計画書には当時三原山計画を主導していた恵谷治氏（えやおさむ）（のちの軍事ジャーナリスト）の手による概念図が記されており、この計画の概要を知るには、それが非常に分かりやすかった。簡単にいうと、この計画は三原山の噴火口の内側のところどころにあるテラスを中継地点にして、酸素ボンベをつけた隊員がワイヤーウインチで下降するというものである。この計画はうまくいき、火口深く潜入した隊員たちはマグマ溜まりの様子を目撃し、写真と映像を撮影した（P. 15写真参照）。

私の部屋の本棚に今も保管されている探検部の部史には、マグマを見たときの興奮が次

のように語られている。

トランシーバーでの交信が密となり、確保ザイルは数cm単位でしか延ばされず、末端に届くのが遅い。ゆっくりと、ε地点へと歩みを進める。

「見えた！真っ赤な熔岩が見えた‼」

私は、第一声を伝えた。記録は十二時五十五分になっている。ε地点からは断崖絶壁となって、眼下に熔岩湖が、踊り狂っていた。波しぶきと同じような熔岩のうねりは、紫色のガスと共に、地表に向かって吹き上（原文ママ）ていた。

（『早稲田大学探検部30年史』）

はじめてこの記録を読んだときは、なんともいいしれない静かな動揺を覚えたものである。その動揺はゆっくりと私の常識にがたがたとヒビをいれ、そして結果的には破砕（はさい）することとなった。噴火口に潜ってマグマを見るという行為にどのような意味があるのか、当時の私はとくに考えなかった。こういう行為にあたっては意味の追求など、それこそ無意味である場合が多くあり、意味などといった既成概念で解釈できるような価値体系にとらわれていたら、こうした常識外れの行動をとるのは難しい。私にとって大きかったのは、

意味などよりも、その行為が持つ純粋な衝撃力、つまり地球のマグマを直接この目で見てやろうという何やら得体の知れない情熱と、おそらく彼らが見ただろう鮮烈な風景だった。

私はたびたび怖いもの見たさのように、我慢できずに三原山のファイルを取り出して計画書をながめた。

この行為の異様さというか、私に動揺や衝撃をあたえたものの正体は、もちろん第一には掛け値なしの非常識さにあった。普通の生活をしていれば地球のマグマをのぞき見る機会など、ほぼ百パーセント訪れない。エベレストの頂上に立つことは今ではさほど珍しい行為ではなくなったが、噴火口の内部に潜降するのは完全に想像圏の外側に位置するといってよいだろう。それと同時に、この行為が何の分野にも属していないということも、何か非常に惹きつけられる要因であった気がする。

私が所属していた九〇年代に探検部が何をやっていたかというと、主に登山や川下りや洞窟といった、すでにアウトドアスポーツのジャンルとして確定した分類可能な活動ばかりで、数年がかりの海外遠征もその分類可能活動の延長線上に沿って企画されたものがほとんどだった。それに比べて三原山計画の分類不可能性は一目瞭然だった。われわれが住むこの日本社会には火山探検、噴火口潜入という行為ジャンルは確立されておらず、三原

山計画はほぼ類例のない独立した行為として、そのファイルケースの中に、いわば唐突に、常識の地平を突きやぶるようにして存在していたのだ。

その行為は、われわれの社会に既存のものとして存在するあらゆる枠組みからはみ出したところにあり、きわめて開拓的かつ実験的な孤高の試みであるように私の目には映った。探検部などという社会の異分子を気取ったような名称を掲げる団体においては、すでに分類され社会化されてしまったような登山だの川下りだのといったアウトドアスポーツに血道をあげるのはある意味邪道、この三原山計画のような予想のつかない行為を追求するのが本道なのである。そして計画書を読んでは、俺もいつかこういうことをやりたいなぁと漠然と憧憬（しょうけい）したのだった。

本書は冒険とは何かを私なりに徹底的に記述した本であるが、ある意味、学生時代にこの三原山計画に対して感じていたもやもやとした感情を論理に訴えて説明しつくしたものだともいえる。

キーワードは脱システムだ。

私が脱システムという概念で探検や冒険をとらえるようになったのはもう七、八年前の

ことになるが（最初は反システムといっていた）、それ以降、読んだ本の内容がこの概念と結びついたり、暇でボケーッとしているときにピンと直観が閃いたりするうちに、このように一冊の本としてまとめられるだけの体系を持つようになった。脱システムという言葉である程度イメージはわくと思うが、この本では冒険がシステムの外側に飛び出す行為であることを示し、そのうえで行為としての脱システムがどのような構造になっているのかを明らかにして、説得力のある言葉で冒険の本質に迫るのが狙いである。

この二〇一八年現在、われわれの社会の中で冒険とされている行動を見れば、それらがどれだけ脱システムという言葉からかけ離れているか分かる。今の日本の冒険界にはかつての三原山噴火口探検のような、一般の常識に挑むような活動は皆無である。そもそもそういう発想で冒険をとらえている人間も、おそらくほぼ絶滅した。少なくとも消息はあまり聞かない。現在冒険と称されている活動は単なるアウトドア活動に毛が生えただけのものか、野外フィールドで肉体の優劣を競うだけの体力自慢による疑似冒険的スポーツがほとんどである。要するにほかの誰かがやったことの後追いばかりが幅を利かせており、三原山計画のような独自の哲学と豊かな発想にもとづいた創造性のある行為はまったく見られなくなってしまったのだ。このように冒険の考え方やあり方が変わってしまった理由も、

そもそも冒険とは脱システムであり、その脱システムがなぜ行き詰まったのかを示すことで見えてくるのではないかと考えている。

本論に入る前に、探検と冒険という言葉の使い方について少しお断りしておきたい。私にとって探検という行為も冒険という行為も、基本的には脱システムという概念によって統一されている。大雑把ないい方になるが、探検も冒険も脱システムするという意味では同じなのだが、その行為のどの側面に光をあてるかによって、どちらの言葉を使うかちがいが出てくる。探検というのはシステムの外側にある未知の世界を探索することに焦点をあてた言葉であり、冒険のほうはシステムの外側に飛び出すという人間の行動そのものに焦点をあてた言葉だ。たとえば私は以前、チベット奥地の、とある大峡谷地帯の無人空白部を単独踏査（とうさ）したことがあるが、無人空白部を踏査した点にスポットをあてればこれは探検だし、世界有数の未知の大峡谷に単独で飛び出したという行動のほうに注目すれば冒険といえる。私はよく探検は土地が主人公の言葉で、冒険は人間が主人公の言葉などといったりするが、それはこういう意味なのである。要は同一の行為でも探検を使うのが適切な文脈もあれば、冒険を使うのがよい文脈もあるわけで、私はこうした基準でこの二つの言葉を使い分けている。

しかし、本書のように全編、探検／冒険を論じる本で、同じような二つの言葉が入り乱れるとさすがに混乱する。ということで本書では基本的に冒険で統一することにした。探検ではなく冒険を使うことにしたのは、冒険のほうが意味が広く、汎用性も高いので言葉としてあつかいやすいからだ。本書のタイトルを探検論ではなく冒険論にしたのも同じ理由である。探検のほうは、どうしても探検じゃないとしっくりこないところでしか使っていないので、そのことだけ理解しておいてもらいたい。探検界、冒険界、登山界の人間は探検と冒険のちがいについてやたらうるさく、ここで一言述べておかないと、また角幡は探検と冒険を混乱しているなどといわれかねないのである。

それにしても二十年前に部室でボケーッとしていたときになんとなく頭の中で考えていた、輪郭のないモヤモヤとしたクラブ活動に対する思いが、今こうして一冊の本となってまとまるのだから、分からないものである。あのとき私がすごしていた時間に生産性はまったくなかったのだが、今になってみると、あのときの時間が揺籃（ゆりかご）となり、こうして一冊の本ができあがるわけだから、あの無為な時間はじつはとても有意義な時間だったのかもしれない。

第1章

本多勝一の冒険論

三原山火口のマグマに接近する早稲田大学探検部員。
「毎日グラフ」1969年1月19日号。

この二十年間、冒険とは何かということについて考えつづけてきた。日々そのことに思考を傾けてきた、というほど熱意あるものではないが、わりと断続的に考えてはきた。

いったい冒険とは何なのか。

たとえば極寒の冬の極地を旅するという試みがあるとする。具体的にいうと、それは標高差千メートルもある氷河を登り、視界のかぎり広がる氷の沙漠としか形容しようのないアイスキャップ（極地や山頂などをおおう氷雪）を、マイナス四十度の強風に叩かれながら、ひどい思いをしてとぼとぼと橇を引きつづけるというような行為である。あるいは人類にとって未知の地理的秘境をめざす旅というのもあるだろう。だが、それとてもヒマラヤの奥深くにねむる大峡谷の空白部をめざし、来る日も来る日も濃密で不快な泥まみれの藪の谷を蠢きまわるという日々にすぎない。

こうした行動は、実際に私が過去にやってきた活動の一例なのだが、冒険に関心のない一般の人たちにとっては単なる難行苦行にしか思えないだろう。そして困ったことに、その印象は基本的にまちがっていない。実際の冒険の現場は文明があたえてくれる便利で快適な空間とは見事なまでに断絶しており、寒さや濡れ、潜在的な死のリスクにとりかこまれた不愉快な時間のつらなりである場合が多い。冒険と無関係な人には、なぜそんな危険

で不快なことを好き好んでやるのか理解できないだけでなく、やっている本人でさえ時々、なぜ自分はこんな苦行のようなことをしているのだろうかとよく分からなくなって、早く家に帰って飯をたらふく食べたいな、と希(こいねが)うのが冒険の世界なのである。

それにもかかわらず、われわれの社会には古くから冒険の魅力にとりつかれ、世界の果てをめざしてやまない病的ともいえる壊れた人間が一定の割合で常に存在してきた。時々ではない。常になのだ。少数ではあるが、人類史は一部の少しいかれたこの冒険族によって動かされてきたという側面が、たしかにある。

理屈のうえからすると人類の歴史上、冒険者が完全に消失した文明や時間は存在しないと思われる。なぜならリスクをとることを完璧に忌避する社会は停滞し、とりのこされ滅亡したはずだからである。数十万年前にアフリカ大地溝帯で祖先となる人類種から枝分かれして進化をとげてきたわれわれホモ・サピエンスには、いつ、いかなるときも、その種族の内部にちょっと頭のおかしな冒険族たちを養ってきた歴史があり、そうした少数のはみ出し者たちが、「ちょっとあの森の向こうの草むらが気になるから行ってみようや」と言い出して、大多数の非冒険族たちが「そんなわけの分からない場所に行くのは危ないからやめろよ」と反対するものの、冒険者のほうは「いやーどうしても行きたい」と説得を

受けつけず旅に出て、案の定、ライオンに食い殺されて死亡、しかし中には未知のサバンナの探検に成功する者もいて、そうした冒険者たちがもたらした情報をもとにマジョリティーである非冒険者たちもぞろぞろと新しい土地をめざし、獲物がたくさんいる新天地に進出して拡散してきた、というのがおそらく人類の歴史を動かしてきたダイナミズムの、根本的な正体なのである。少なくとも私はそういう歴史観を持っている。つまり冒険という行動様式は本能レベルで組み込まれた人類の宿業（しゅくごう）のようなものであり、その功罪は別として、人類の文明や社会を動かす力でもあるわけだ。もし、人類が冒険を極端に忌避する好奇心と行動力の欠如した生物種だったら、われわれ現世人類は今でもアフリカの大森林の取るに足らない一角で、ボノボのように性器をいじりあって生活する平和な楽園をきずいていたかもしれない。

いずれにせよ冒険には一部の人間を惹きつけてやまない魅力がある。たとえ現場でどんなにつらい思いをして早く家に帰りたいと願っても、家に帰ってくるとまた次の冒険プランに胸をときめかせ、もぞもぞと準備を開始してしまうのが冒険者の生態である。

世界の可能性を拓け

私が冒険について考えるきっかけをつくったのが大学探検部だったことは〈はじめに〉で書いたが、この探検部というのは不思議というか、大学の吹き溜まりみたいなしょうもないクラブで、二十世紀も末にさしかかろうというのに探検などという時代遅れの行動を指向する連中が集まっているのだから、まあまあ、それはもうオメデタイとしかいいようのない集団だった。だが、もし私が入部していたのが探検部ではなく山岳部だったら、これほど深く冒険について考察する必要はなかっただろう。

山岳部というのはやることが決まっている。山に登ればいいからだ。山に登るのは決して簡単なことではないが、それでも山に登るという目的は決まっているので、存在論的なところでうじうじ悩む必要はない。どこの山に登ればいいのかについては悩むかもしれないが、自分は何をしたらいいのだろうという根源的なレベルの悩みからは解放されている。それに対して探検部はやることが決まっていない。探検という言葉は語義が曖昧なうえ、各自が異なったイメージを持っているため、部員は探検とは何かを自分で考え、それを実際に行動にうつして表現しなければならないのである。

私が入部した当時の探検部の新入生勧誘ビラには、でかでかと〈世界の可能性を拓け〉と大仰な文句が書かれていた。探検の全体像が固まっていない以上、部員たちは良心にし

たがって自分が探検だと思う行動をとればいいのだが、しかし、たった一つだけ約束事があって、その活動は世界の可能性を拓くものでなければならないというわけだ。

今考えても、この〈世界の可能性を拓け〉というキャッチフレーズは冒険や探検行為の核心をズバリと突いた見事な言葉だったと思う。世界の可能性を拓くためには、世界についての明確な像を自分なりに確立しておかなければならない。すでに可能性が拓かれてしまった領域に探検の可能性はない。たとえば私は山が好きで大学時代は国内で登山ばかりしていたし、卒業後もしばらくはその面白味の虜になっていたのだが、それでも自分の探検活動を登山という行動形式で表現しようと思ったことはこれまで一度もなかった。なぜなら登山というのはすでにジャンルとして確立されており、社会的認知を受けている。そうである以上、登山はすでに拓かれた領域だといえるわけで、その意味では探検的ではないような気がしたからである。同様に川下りとかケービング（洞窟探検）とか自転車旅行とか、そういうある特定のジャンル化した行動、アウトドア専門店に行ったらそれ専用の販売コーナーができあがっているような活動にもどこか醒めた意識があり、そういったものとは一線を画した、まだ命名されていない知られざる行動形式によって困難な旅を実践してみたいと学生時代から欲求していた。それこそが探検という言葉に値する行為であり、

冒険の秘密を解く鍵だと思っていたからだ。

それ以来、私はヒマラヤの奥地の峡谷の斜面トラバース（標高差をなるべく変えずに山中を水平移動する登山用語）を延々とつづけたり、太陽の昇らない冬の極地で一匹の犬を連れて長期間放浪するといったような、できるだけ拓かれていないと考えられる領域での行為を模索してきた。そのため以前所属していた新聞社のスポーツ部記者からは、どうしてそんなわけの分からないことばかりするのかと散々聞かれたが、その質問は私に、自分の行為の冒険的正当性を確認させただけだった。新聞というのは社会の木鐸なので、新聞記者というのは社会的な観点から見て正統的な行為しか評価できない思考回路を持っている。その新聞記者からわけが分からないと評価されるということは、自分が社会的正統性の埒外の未開拓な領域で行為できていることの証明にほかならず、探検的に正しいことをしていると思えたからだ。

探検部が教えてくれたのは、バンコクのパッポン通りに行くときには十分な資金を用意しなければならないことと、探検や冒険を実践するためには世界のどの領域の可能性が拓かれており、どの領域がまだ拓かれていないかを自分なりに見極めなければならないことの二つだった。この二つの教訓は今でも非常に役立っている。大学生の頃は、私もまだそ

のあたりのこと（もちろん後者のほう）を直観でしか理解していなかったが、それから二十年、自ら冒険旅行を実践して、それを著作物で表現して世に問うという活動をするうちに、冒険の全体像を理論立てて考えることができるようになってきた。おそらく私は冒険というものを自らの経験をベースに、現在の時代状況と照らしあわせて論じることのできる日本で唯一の人間であろう。

冒険を実践し、冒険について考察してきた一人の人間として感じるのは、この二十年で冒険をおこなうのが幾何級数的に難しくなってきたということだ。産業が発展してテクノロジーが進歩したことにより人類は地球上のほとんどあらゆる場所に苦も無く足を運べるようになった。その結果、冒険は大衆化し、容易になり、テレビ番組をつうじてお茶の間に浸透しているように思える。だが、大衆に訴えることを狙った活動は、じつは冒険っぽいイメージだけをまとった見せかけだけの疑似冒険にすぎないことが多い。辺境へのアクセスが容易になったことで、逆に本物の冒険は難しくなっているというのが、私の偽らざる実感である。

なぜ本物の冒険が難しくなったのか。この問いに対する答えの中には、現代社会のひずみやわれわれ自身の意識の変化が隠れている。それを探るには、そもそも冒険とは何なの

かを考察しなければならない。そして冒険の本質を見極めることで、私は現代という時代に特有のある種の社会病理も浮き彫りになると考えている。

現代では人は冒険をしているようで、じつは冒険をできていない。当事者は冒険をしているつもりなのに、それが冒険になっていないうえ、本人がそのことに気づいていないという冒険的にはじつに皮肉な時代をむかえている。

冒険とは何か——本多勝一の冒険論

冒険とは〈歩く〉とか〈食べる〉とか〈動く〉といった言葉と同じように、基本的には人間の行動様式を示す言葉にすぎない。冒険をする、という文章はそれだけで独立して意味をなす。しかし〈歩く〉〈食べる〉〈動く〉が誰にとっても意味が明瞭な人間の基本的な動作をあらわす言葉であるのに対し、冒険という言葉にはもう少し複雑な意味の広がりがあるように思える。早速、辞書で調べてみたところ、冒険とは〈危険をおかすこと。成功のたしかでないことをあえてすること。〉（広辞苑）だそうだが、この簡潔な語義では冒険行為の実相をとらえているとはいいがたい。冒険という言葉の背後にはこうした辞書的な定義を超えたもっと広漠とした何か、まだ定義されていないもやもやとした領域が広がっ

ているはずである。

では、冒険という行為は厳密にどのように定義できるのだろうか。

冒険を考察するにあたって避けて通れないのが、ジャーナリストの本多勝一（ほんだかついち）による一連の冒険論である。今でこそあまり名前を聞かなくなったが、本多勝一といえば『ニューギニア高地人』『カナダ＝エスキモー』『アラビア遊牧民』のいわゆる極限の民族三部作や、中国報道やベトナム戦争報道、近代文明にはびこる差別構造を告発した『殺される側の論理』など数々の傑作ルポを発表してきた朝日新聞の看板記者だった。私の学生時代にはまだ、そこそこの規模の本屋に行けば必ずといってよいほど黒い背表紙の本多勝一シリーズがならんでおり、その一角だけなにやら社会的矛盾がむらむらと臭ってきそうな異様な雰囲気を醸し出していたものである。

登山界や探検界では知らない者はいないが、じつは本多勝一は京都大学に日本ではじめての探検部を創設したメンバーの一人であったことからも分かるように、すぐれたジャーナリストであるだけではなく、今西錦司（いまにしきんじ）や梅棹忠夫（うめさおただお）の系譜をうけつぐ日本探検界の正統的な継承者でもあった。極限の民族三部作は記者であり探検家でもある本多勝一という書き手の特色が最も強く反映された作品であり、そのほかにも『植村直己の冒険』『冒険と日

本人』といった著作をつうじて、彼は冒険を多角的に論じてきた。

大学こそ異なれど、探検部員であった私にとって日本初の探検部の創設者である本多勝一は、末端組織の構成員にとっての山口組の親分のような存在だった。登山や冒険の世界にまったく無知な状態で探検部員となった私は、本多勝一の著作を読むことで思いっきり彼の原理主義的な冒険論の影響を受けた。とりわけ彼が京大時代に書いたという、二人の山岳部員が対話するかたちで展開される「『創造的な登山』とは何か」という一篇には強烈な衝撃を受けた。それはもはや衝撃とか影響とかいうレベルではなく、ほとんど被爆といってよかったと思う。木造モルタルアパートの薄暗い共同便所で本多勝一の本をめくっていた私は、パイオニアワーク論と呼ばれる彼の有名な冒険思想に触れ、その感銘と押し寄せる便意が混合して便器のうえでプルプルと震えていたのである。

アインシュタインの相対性理論が $E=mc^2$ というきわめて簡潔な方程式で示され、またワトソンとクリックがDNAの立体構造が二重螺旋というじつに美しいかたちであることを突きとめたことからも分かるように、世界の仕組みを解き明かす原理はどれもこれもシンプルだ。同様に本多勝一の冒険論もシンプル極まりなく、それゆえ現代においても強い妥当性を持っている。

新・冒険論
角幡唯介・著

発　行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定　価：740 円（本体）＋税
発売日：2018 年 4 月 6 日
ISBN：978-4-7976-8023-2 C0295

ウェブでのご予約・ご注文は こちらにどうぞ！